

ていることを示すとともに、神についての人間の認識の徹底的な否定のうちに「神の誕生」があるという説教 71 の主旨を浮き彫りにしている。

11. 83 年より全集版ドイツ語著作集の編集者であるゲルマニスト Steer は、全集版ドイツ語著作集第 4 巻に掲載される予定の説教 101 を編集し訳出解説している。説教 101—104 は「神の誕生」をテーマに連続して行われた説教と推測されるが、そのうち説教 101 は最初になされた最も重要な説教であるとされる。Steer の解説は写本の伝承および真正性の検証に始まり、説教の構造を分析した上で、エックハルトの「神の誕生」の独自性を論じている。

12. アメリカの神秘主義研究者である Bernard McGinn は、本書唯一のラテン語説教である説教 IV を解説している。エックハルトのラテン語説教は完成されたものではなく草稿であると考えられている一方で、ドイツ語説教にも通じるさまざまな表現を含んでいる。McGinn が指摘するように、説教 IV も、三位一体についての人間の認識の限界についての表明や、神と世界の関係についての弁証法的表現を含み、また、三位一体内の愛と、神と人間の愛との同一性を説いている。McGinn はそのような説教 IV に、ラテン語著作の三位一体論とドイツ語説教の「三位一体の神の突破」のモチーフとを統一的に理解する手がかりを見ている。ラテン語説教はエックハルト理解にとって重要なテキストであり、Lectura Eckhardi の続巻には更なるラテン語説教が掲載されることを期待したい。

---

水田英実著『トマス・アキナスの知性論』

創文社、1998 年、xi+290+79 頁

宮 本 久 雄

本書はトマス哲学における「知る」についての論究である。それは著者の言葉をかれば、「〈知るもの〉と〈知られるもの〉の間に成り立つ関係としての〈知ること〉ではなく、〈知ること〉の成立を通してあくまでも〈知るもの〉としての人間知性のあり方を考察の主題とする」厳しく奥行き深い論究なのである。今は多弁をろうす

ることなく直に本書の内容の紹介に参入してゆきたい。

第1章「真理認識に対する欲求と節度—“naturaliter scire desiderant” (Ar., Metaph.)の解釈—」。本章は「すべての人間は生まれながらにして知ることを欲する」というアリストテレスの言葉に対するトマスの注解・解釈に関わる。すなわち、すべての人間に内在する知への本性的欲求の考察・解釈であり、トマスは三通りの解釈を提示する。第一は、人間の可能知性が知識を得て現実的認識者になるという現実化の中に、質料の形相への欲求に比される本性的欲求を見出す解釈。第二は、重いものが落下する自然本性的傾向をもつように、人間も知への自然本性的欲求をもつという解釈。第三は、「分離実体が人間の知的認識の根源であり、これに対して人間知性は、完全なものに対する不完全なものとして関係している。人間は知性によってでなければ〈分離実体との接続〉を果たすことはできない。しかし人間の究極の幸福とは〈分離実体との接続〉を果たすところにある」とトマスは言い、この接続による知の獲得こそ、人間の本性的欲求・幸福であるとされる。

ところでアリストテレスのいう分離実体をめぐっては、周知のように能動知性あるいは可能知性として後に解釈されたが、その場合トマスにとって分離実体は神であり、能動・可能両知性は人間に内在する能力であった。とすれば、〈分離実体との接続〉とは、分離実体が分離実体を、神が神を知ることではなく、人間が神を知るといふ神認識のテーマとして浮上してくる。それを水田氏はトマス形而上学に固有な「存在しているもの」の類の拡大という氏の中心的主張と結びつけて主張される。第2章「『エチカ注解』におけるアヴェロエス説批判」はこの展開の第一歩をしるしづけるものである。それはどういうことであろうか。アリストテレスは、その『デ・アニマ』第三巻で、いわば未解決のまま能動知性と可能知性の問題を残した。そこでアフロディシアスのアレクサンドロスは可能知性（われわれ自身）を可滅質料的であるとし、能動知性を『形而上学』の神的知性と同一視し、その人間の魂への内在を否定した。これに対してテミスティウスは、能動・可能両知性の内在を説いたとされる(247頁)。両者を承けてアヴェロエスは、能動・可能両知性を離在実体として解釈し、人間の認識が成立するのは、単一な可能知性における可知的形象が、多数の人々の多数の表象において多数化されることを通して成立すると考えた。アヴィセンナにいたると、可能知性は理性的な人間の魂に根拠をもって多数であるが、能動知性は単一な離在実体であると説く。トマスは周知のようにアヴェロエスやアヴィセンナを批

判して、生前の生が営む、神に関する不完全な観想の中にも幸福があるとするが、これは以上のような知性の離在説批判に基づく人間的至福の地平の開披であり、そこに水田氏は「存在しているものの類の拡大」を洞察する。第3章『『デ・アエマ注解』における可能知性の問題』は、「この人間が知る」ことの確証を通して、如上の論点を確認し、第4章「可能知性単一説に対する論駁」で、トマスがアヴェロエス説を批判した哲学的根拠が見事に際立たせられている。すなわち「アヴェロエスは、知性認識の非質料性に拘泥するあまり、知性を身体の形相としての魂のうちに措定することができず、能動知性のみならず可能知性もまた離在すると考えた」（97頁）。これに対してトマスにおける知性の魂内在と超越説を支えるのが、彼の哲学上の洞察である《エッセ》の認識であった。彼によると能動・可能知性とその働きは、あくまで身体に結合した形相としての魂に内在しているので、個々人の能力であり働きである。しかし、この人間の知的形相的魂は、他の生物の魂と異なって身体に依存しない。それはそれが自分固有のエッセを有し、一方で身体的器官を用いた能力作用を行うほかに、他方で自分自身の作用を行うからである。その場合、魂の多様な能力と働きにも拘らず、このエッセにより魂は常に一である。だから魂は能動知性と可能知性の二つの作用を自らの作用としてなしつつ、一なる自存者として存在するわけである。この《エッセ》の認識に関して続く第5章『『存在しているものと本質』序文における《エッセ》の認識』が論述され知性のエッセ（*esse intellectuale*）の視点でアヴェロエスの単一知性説が批判される。すなわち、アヴェロエスは可知的形象の普遍性からすべての人間にとって知性は単一であると結論づけた。けれども、トマスは、可知的形象は魂の外の多数の個別に対しては多に対する一という普遍的性格をもつが、それは魂の中で知性のエッセを与えられてある限り個別的な形象である点を指摘して、アヴェロエス説を斥けているというわけである。第6章「本質の二義性と知性の《エッセ》」および第7章「認識者としての魂《エッセ》」は以上の論述の詳細な確証となっている。そして特に第8章「魂の不死に関するトマス説とカエタヌス説」において、知性のエッセの視点が根源的に深められている。すなわち「われわれが知的本性を有するものとして存在するというまさにそのことにおいて、われわれ自身の《知性のエッセ》が現実態にあることが、われわれ自身に知られているということによって」（166頁）、魂が固有のエッセを有することおよびそのエッセの認識をうることができる。その際、《知性のエッセ》に関する根源的な認識は、可能知性の判断以前に、最初か

らずで何らかの仕方で現実態にあるエッセの、つまり実体としての魂のエッセの manifestatio であるのであり、さらにそれこそ知性の能動性の根拠である点がさらに洞察されるのである。こうした魂について不死性の証明はできるが、如上のエッセの思想を知らないスコトスは魂の不死を論証不可能としたわけである。続く第9章「生命を与える魂—存在を与える形相—“Vivere viventibus est esse” (Ar., De an.) の解釈」では、感覚する、知解するというような付帯的形相に由来する生命の非本来的働き（とその言語用法）に対し、実体的形相たる人間の魂の知解という本来的な生命的働き（とその言語用法）が区別され、本来的用法の枠組においてこそ、アリストテレスの生命観 (Vivere viventibus est esse) が、intelligere intelligentibus est esse として拡大解釈されえ、さらにそこに「生ける神」も含まれるという仕方で「存在しているもの」の類の拡大が強調されている。第10章「第4の道と『存在しているものと本質』」においても如上の拡大の問題が扱われている。トマスによる5つの神存在論証の一つである第4の道では、『存在しているものと本質』におけるのとは異なり、「存在しているものの類」は、概念的な存在も含めた一切の存在の原因としての神をも内包し拡大されて考えられている点が指摘される。これとも関連するが続く第11章において「第1に認識されるもの」は、たとえそれが「何性」であれ、「在るもの」であれ、認識の「quo」（それによって認識対象が現実態においてあらしめられるもの）として根源的に知られる《エッセ》認識を伴い、この知性の《エッセ》こそ究極的な神認識にいたる道の端緒であることが示される。第12章「トマスのイデア論」は、その神のイデアと「存在しているもの」との関係を考察する。続く13章「トマス哲学における能動知性の問題」は全体の総括として、アヴィセンナの能動知性の離在説を修正したトマス哲学と神学の洞察を示している。それは、「被造的知性は、神がその恩寵によって自らを被造的知性に統合させるのでなければ、被造的知性にとって可知的なものとして、神をその本質によって見ることはできない」(S. Th. q. 12, a. 4, c) という哲学的神学的ヴィジョンに外ならず、その下に能動知性の離在説が神的知性の離在説として修正されているのである。第14章「トマスの知性論における存在認識」は文献の上でトマスの《エッセ》認識の確信を確かめる作業となっている。

以上の概観を経てみると、水田氏の思索全体を貫く2つのポイントが明らかになるであろう。その一つは、「存在しているもの」の類の拡大であって、実体の現実性の

位階に従って質料的存在から神存在へといたる観想を可能とする形而上学的な視点であり、その二つ目は、第一の視点に基づき、認識者たる人間が神に知られた者になるという至福直観の地平である。それは当然、認識において認識者と認識されるものが合一するというアリストテレス的な神との合一思想を批判することになる。さてしかしこのような水田氏の思索の展開を支える核心は、何といても魂の自己意識に伴う《エッセ》認識であろう。その《エッセ》の洞察によって、トマスは単一知性説や知性の離在説を超克できたのであり、さらに人間みなに至福への知的眼差しの次元を示しえたのである。そこで本書の豊かなトマス知性論は次のような研究方向に将来的な途を被くと思われる。その一つは、近世のデカルト的コジトとの対決であり、第二にエックハルトなどの知的神秘主義との対話であり、第三に「存在・神論」(onto-theo-logia) に対して応答しつつ《エッセ》を再び現代に示すことであり、最後に科学的知識をモデルにとる現代哲学の知識論へのインパクトとなることである。